

さいたま市所蔵品展 講演会

「西澤笛畝とその周辺の人々

～人形芸術運動を中心に～

日時：平成27年3月1日（日）

13：30～15：00

会場：市民会館うらわ コンサート室

主催：さいたま市文化施設建設準備室

【講演】吉徳資料室長 小林 すみ江 氏 司会者 大槻りこ氏

◇主催者あいさつ（さいたま市 市民・スポーツ文化局 野間 薫局長）

皆様こんにちは。さいたま市 市民・スポーツ文化局長の野間でございます。
ご来場の皆様には、本講演会にご参加をいただき、誠にありがとうございます。

本日、ご講演いただきます、小林すみ江様は、現在、吉徳資料室室長を務められ、人形史研究家として多くのメディアに出演されるなどご活躍されております。

また、小林様の父、山田徳兵衛氏は、浅草橋の人形問屋「吉徳」店主で、人形研究家としても知られ、西澤笛畝氏と交流が深く、二人三脚で人形芸術運動を進めた方でもございます。

今回の講演は、この人形芸術運動を中心に笛畝の業績と交流録をとおして、日本の美術史において人形が美術として位置付けられていく過程などご紹介いただきます。

人形文化の振興を進め文化芸術都市を目指す、さいたま市にとって大変貴重な講演と考えております。どうぞ、皆様方にとりまして、本講演会が有意義なものとなりますことをご祈念申し上げ、簡単ではございますが、ごあいさつとさせていただきます。



◇小林すみ江氏登壇

◇小林氏と大槻氏の対談

大槻：こういった講演会というのは、結構この時期は特に忙しいと伺っておりますが。

小林：はい、やはりおひなさまの時期になりますと、いろいろお問い合わせとかが入りますので、3月3日までは忙しくしております。うちの主人からは「お前は季節労働者だ」と言われております。

大槻：一番のかき入れ時でございますものね。先ほど局長からもご紹介があったように、台東区浅草橋の老舗人形問屋、株式会社吉徳の社長でいらした山田徳兵衛氏のご長女でいらっしゃいます。お父様、徳兵衛様は何代目になられますか？

小林：うちの父で10代目になります。同じ浅草橋の場所で、正徳元年、1711年からずっとその場所を動かしているという事だけが、私どもの店の自慢でございます。

大槻：こちらは吉徳資料室長をお勤めになっておられまして、テレビでは「何でも鑑定団」の人形ジャンルの鑑定士としてもおなじみでございます。先ほどは、展示会場でも小さい人形をお持ちになったお客様が「ちょっと見て下さい」ということで、軽く鑑定をなさっておられました。そして今日もたくさんお見えだと伺っております、日本人形玩具学会の代表でもいらっしゃいます。

小林：平成元年に人形玩具の研究団体としまして、日本人形玩具学会というのができまして、今日もその中からサクラとして、何人か来ていていると思います。

大槻：普段はどういったご活動をされているのでしょうか？

小林：日本人形玩具の研究は従来進んでおりませんでしたので、それを学問的に進めようということで、平成元年に結成されました。今、全国で200人ほど会員がおりますけれども、古い人形の研究をしている者、最新流行の人形の研究の者、作家の方、コレクターの方、あるいは美術館・博物館の学芸員の方、大学関係の方ですとか、随分いろいろな方が集まって、学会と申しましても、大変楽しく皆で交流している団体でございます。

大槻：そちらでもご活躍の小林先生なのですから、歴史から紐解いていかせていただきます。さきほどお父様のお話をちらっとお聞かせいただいた時に、会社の人形問屋の吉徳さんはずっとその場を離れていらっしやらないということでしたが？

小林：今、私どものいる場所は江戸通りと申しまして、突き当りが浅草寺さんになっており、昔から人通りの多い所だった。そういうことで、10代前、今12代目ですけども、12代前の先祖が小さなお土産の店を開いた。それが私どもの店の発祥でございます。創業304年になります。東京では一番古いと言われております。

大槻：震災があつたり、戦災があつたりしても、その場所を動かずに？

小林：はい、先祖代々の場所なので、場所だけは動いておりません。

大槻：それは何か理由もございませうか？

小林：先程も申しましたように、やはり人通りが多いということ。それからあそこは隅田川と神田川の合流点になりまして、昔は物を運ぶのは船でございましたから、船が今の高速道路を駆けるトラックの役目をしておりまして、そういうことで川の近くに問屋が集まったわけでございます。ですからあの辺、日本橋側も台東区側も両方、問屋がたくさんございませうのは、そういうわけでございます。

大槻：では小林先生の幼少の頃のこの時期、3月のおひなまつりというのは、それはそれはもうお忙しく？

小林：そうですね。店としては3月3日までは仕事が忙しくて。ですから私は子供の時を思い出しても、自分の家でゆったりひなまつりをしたという経験がありません。

大槻：先生がゆったりとしている感じに見えるお写真がございませうけれども。

小林：それは多分、新聞社かあるいは雑誌社が写しに来た写真でございまして。

大槻：これは吉徳のひな人形とはこういうものですかという、何かそういった取材ですか？

小林：吉徳のひな人形というより、山田家のひな人形なんですけれども、当時、今みたいにお子さんのタレントがいませんから、私と家付きのタレントがモデルになりました。今で言う読者モデルです。「小学校を早引きして今日は帰ってこい」とか言われまして、しかも撮るのが夏ということもございませうので、夏でも冬の着物を着て座らされて、「お辞儀をしろ」とか「笑え」とか言われまして、私にとってはおひなまつりというのは恐怖でございました。

大槻：胸の内では、早く終わってくれないかと？

小林：そうですね。

大槻：向かって右側が先生ですね。

小林：はい、右側が私で、左が私の学友で仲良しの近所のお友達でございます。

大槻：抱っこしているお人形さんは？

小林：今で言う市村人形、当時は大和人形と申しましたけれども、多分商品の中から選ばれて、抱かれていたのだと思います。私の遊んでいた人形ではございませう。

大槻：遊んでいたお人形だったり、実際に先生用のお父様が充てられたおひな様というのは、やはり一流の方の最高級のものですか？



小林：これは当時、私の上にふたり姉がおりましたのが、早く亡くなりましたので、その後に生まれた私のためにということで、私は昭和5年生まれでございますけれども、昭和6~7年くらいまでかけて、山田家のひなとして作ったもので、全部家紋が入っているという、当時としてはちょっと贅沢なひなだったかと思います。

大槻：お人形さんの遊び方というのは、今はよく一緒に寝たり、お風呂にも入れたり、散髪したりとか、人形の扱いが随分違うと思いますが、当時は？

小林：当時の人形は、今の人形、たとえばリカちゃんのように、ソフトビニールがございませんので、「お人形さんは大事にしてください」という、そういう教えでございまして、あまり一緒に寝たことはないと思いましたが。遊ぶときはもちろん、出して遊びますけれども、一緒に寝るようなことをすると、汚れたり壊れたりしますので、抱いて寝たりした記憶はあまりございません。

大槻：お父様はやはり、お人形の扱い方というのはとてもお厳しくおっしゃったのでしょうか？

小林：父からはあまり言われたことはありませんが、祖母からはよく言われました。

大槻：ちょうどお写真が。これは吉徳商店の看板がございませぬ？

小林：これは戦争中の、おそらく昭和16年あたりのお正月だと思っておりますけれども、うちの店の前で当時の社員たちが並んだ記念撮影です。

大槻：女性もいらっしやいますね？

小林：はい、女性もタイピストとかおりましたので、4~5人いつもおりました。これは時代を物語っているのは、当時国民服と言って、背広でなくて、国民服を着るという事が政府から奨励されたので、その国民服を着ている姿でございます。この後、昭和20年に戦災でこの店は焼けまして、この中にもふたりばかり、戦災後行方が分からなくなった人間、それから出征したきり帰ってこなかった人間もございまして、懐かしいけれども、私にとっては悲しい写真でございます。

大槻：お父様は写っていらっしやいますか？

小林：真ん中におりますのが父です。左から5人目が父です。

大槻：お父様は随分歌舞伎にもお詳しくて、よくお嬢様でいらっしやる小林先生をお連れして行かれたりとか？

小林：はい、歌舞伎は人形のかなり重要なテーマになりますのと、父が東京育ちですから、歌舞伎が大好きでございまして、もののわからない頃から、随分歌舞伎には連れていかれました。

大槻：普段は、ご家族とのお時間というのは結構お取りになっていらしたのでしょうか？

小林：そうですね。この頃は店と奥というように呼んでおまして、住まいが奥にございましたので、店との接点が大変近かったです。ですから、店の人間ともよく交わっておりました。

大槻：住み込みということですか？

小林：番頭さんたちは所帯をもって別になっていましたけれども、若い人たちは当時兵隊検査といって、20歳になると軍隊の検査がありまして、それまではうちの別棟に大体15~16人は住み込んでおりました。

大槻：小林先生は、お父様の秘書的役割を担っていらっしやった？

小林：それは戦後の事でございまして、昭和27年から、結婚する31年まで4~5年、うちの父の秘書というか、そばにいろいろな手伝いをしておりました。その時に学んだことが今頃になって役に立っていることもございます。



大槻：例えば、どういったことでしょうか？

小林：父が原稿を書きまして、明日までにこれを出さなければならないという、お前清書しておいてくれというふうに、私が原稿のお清書をするのがよくございました。そういうことで、ずっと見よう見まねというか、父からちゃんと教わったことはないのですけれども、人形に接する機会、あるいは人形の歴史に接する機会は比較的多かったかと思います。

大槻：お父様はたくさんご本をお出しになっていらっしゃるんですよね。そういった本の中でも出てくる時代背景の中で、今回の大きなテーマでもある西澤笛畝という人物が出てまいりますけれども、小林先生は実際に笛畝さんにお会いになっていらっしゃるのでしょうか？

小林：戦前から、おそらく関東大震災の後くらいからだと思います、いつからかはわかりませんが、笛畝画伯とは本当に家族ぐるみのお付き合いで、しじゅう笛畝先生が羽織袴でお見えになっていたことを、私が子供の頃ですけれども覚えております。

大槻：とても大らかな方だとか、いろいろな文献でお人柄を書いておられますが、今回は西澤笛畝ひとりにフォーカスいたしまして、この後、先生にお話をたっぷりとしていただきます。これは？

小林：これは笛畝さんと、美術史家でいらっしゃる笹川臨風さん、それからこのお写真の時はもう亡くなられておられるのでお出になっていらっしゃるかもしれませんが、童話で有名だった巖谷小波さん、そのお三方が私共の会社の顧問をしていましたので、そのときの何かの会合の写真だと思います。一番左に笛畝さんが座っていらっしゃいます。

大槻：美形でいらっしゃいますよね。

小林：笛畝さんはなかなかハンサムでいらっしゃったという覚えがございます。

大槻：お父様もそうですけれども。常にそういう形で、人形にまつわるお仕事の際に、お父様と笛畝さんはご一緒なさっていることが多かったんですか？

小林：そうですね。それからうちの人形の組合という、…組合の顧問もなさっていましたので、笛畝さんがうちにいらっしゃることは大変多かったと記憶しております。ただ、私は子どもでしたので、いらっしゃる「こんにちは」とかご挨拶するだけで、特にお話を交わしたことはないのですけれども。そんなことがございました。

大槻：お父様から笛畝さんのお話はよくお聞きになっていらっしゃいましたか？

小林：笛畝さんのですか？特に交わしていませんが、本当にしょっちゅうお見えになっていましたので、非常に親しい間柄だという事はわかっておりましたけれども、何しろまだ子供でございましたので、偉い絵の先生だという認識でした。それと、よく講談社が出していました絵本で、笛畝さんが絵を描いていらっしゃる本が何冊がございまして、この方があの絵を描かれたんだなと思ったことはございます。



大槻：笛畝さんとの交流で、これは絵馬を献上なさった時のお写真ですか？

小林：これは、今も上野にあります、上野の山に清水観音堂というところがございます。ここは子供授けで有名な観音様でございまして、子宝を祈願する方がこちらにお参りされると、小さなお人形をいただくんですね。それを一生懸命大事にしている間にお子さんが授かりますと、今度はお人形をここに納めるという風習がありまして、そのお人形を多分9月のお彼岸の頃にこちらでは人形供養日といって、焼いたり供養なさっていて、お人形に大変ゆかりの深いお寺なんです。そちらに大きな絵馬を奉納しようかという事をうちの父が発案いたしまして、巨大な絵馬を笹川臨風さんの監修で笛畝さんに描いて頂いたわけです。これは今も残っておりますが、お線香の煙で

真っ黒になってしまっていて、あまりよく絵が見えなくなっているかと思います。この絵馬が資料的に非常に貴重なのは、額の周りにその当時、一円寄進した方の名前がびっしり彫られているわけで、それが昭和の初めの人形界にどういった人たちがいて、どう関わっていたかがわかる、非常にいい資料になっています。笹川先生もちろん書かれていますし、あと巖谷小波さん、歌舞伎俳優、新派の俳優の花柳章太郎さん、童画家で有名な武井武雄さんなどもこの寄付に応じていらっしゃるの、そうしたお名前も載っております、大変資料的に貴重な絵馬となっております。

大槻：その時代背景なども含めて、今回、西澤笛畝さんのお話をたっぷりとしていただきたいと思います。では「西澤笛畝とその周辺の人々」よろしくお願い申し上げます。

◇小林すみ江氏講演

時間的に30分と仰せつかっておりますので、とても笛畝さんのすべてを語ることはできませんけれども、私が知る範囲で、その業績とかお人柄を語らせて頂きたいと思います。駆け足で申し上げますので、どうぞお許しください。

まず笛畝さんの生い立ちから申し上げますと、1889年、明治25年に東京浅草の吉原に近い千束町でお生まれになりまして、本名は石川昂一さんとおっしゃいます。おうちには絵看板屋さんで、えびなやさんというおうちだったと伺っております。少年の頃から、絵看板屋さんですから、歌舞伎のお芝居の看板を描くとか、そういうことを大変なさっております、その絵の力というはおそらくご町内では評判だったと思われる。そうしましたら、そういう並々ならぬ絵の才能を見込まれ、町内の旦那衆という方々がこの子を立派な絵描きにしようじゃないかということだと思っておりますが、金銭的な援助をなさいまして、笛畝少年は、日本画で大変有名な荒木寛畝さん、そしてそのご養子さんで後を継がれました荒木十畝さん、その方々に師事をなさいまして、めきめきと頭角を現したわけです。十畝さんが亡くなられた後は、読画会という十畝さんたちがなさっていた一門の会を笛畝さんが率いられたということで、その実力はよくわかるかと思われ。さきほど申しました、町内の旦那衆から援助を受けたということは、私は全然存じませんでしたけれども、20年くらい前、その町内の旦那衆であった方のご子息からお手紙を頂きまして、実は笛畝さんが画家として一本立ちするには、うちの父とか近所の旦那衆が援助をして画家に育てたのだということを書いていらっしゃいます、これは誠に下町の人情というか、当時の下町のご町内のあり方を知る、心温まる話だと思ったことをよく覚えております。そうして画家として育てられたのが、笛畝さんでございます。当時文部省の管轄で、お役所指導でやらせたいわゆる官展、文部省の展覧会の文展、もうひとつ帝国美術院展の帝展というのがございまして、これはのちの日展になるわけですが、そうした官展の画家として、笛畝さんは大変活躍されまして、何度も入選され、そのうち帝展の監査ということで、監査なしで出品されました。そして昭和9年、帝展の審査員になられるという、帝展を土台として活躍された方でございます。なお生前には、お人形の絵もたくさん描いていらっしゃるの、みなさんお人形の絵でご存じの方もたくさんおいでかと思えますけれども、やはり荒木派の花鳥画を受け継いだ方ですから、本当は花鳥画の作品に大変優れたものが多くございまして、やはりこの方は花鳥画の方だなど、私はいつでも思っているわけでござい。お人形の絵の方で大変有名ですけれども、こうしたものは国立近代美術館などでも収蔵されているということを知りました。笛畝さんの花鳥画としての位置も大したものだったなと私は思っております。



そんなわけで笛畝さんは絵描きさんになられたわけですが、その笛畝さんの大きな転機となりましたのが、西澤仙湖さんという方との出会いでございます。大正元年、23歳の時に、大供会という会が催しました古いお人形の展覧会がございまして、その時にたまたま西澤仙湖さんがその同人のひとりでいらっしゃり、仙湖さんと笛畝さんがお会いになった。そしてそのことがご縁になりまして、おそらくその笛畝さんの才能とお人柄を見込まれたのだと思いますけれども、翌年仙湖さんのご長女でいらっしゃいます西澤かつこさんと笛畝さんが結婚ということに発展いたしました。これは本当に仙湖さんの目があったんだと思いますけれども、笛畝さんのひとつのお人柄と才能を表すことだと思っております。

笛畝さんのその後の活動は、石川姓から西澤姓に変わられるわけですが、ご養父となられました仙湖さんの収集品と、またその非常に豊かな人脈とをそのまま忠実に受け継いでいらっしゃるということ、そういうことがのちの西澤笛畝さんを育てたと思っております。笛畝さんご自身も、雑誌の『人形制作』という本の中に、父の趣味に感化されて、「酒も飲まず、歌も下手で、別段これという趣味もないままに、楽しみながら会議して今日に至っている」と書いていらっしゃいます。楽しみながらというのが大変楽しゅうございまして、笛畝さんご自身もお人形を決して嫌いではなかったと思うのですが、楽しみながらこれを研究なされたという事が大変興味深いところでございます。



笛畝さんがごく初期に人形を描かれたものに、木版画で京都の芸艸堂から出ました『雛百種』というものがございまして。出たのは大正四年ですが、その前の年に仙湖さんが亡くなられて、それを偲びまして、仙湖さんが収集した古いおひなさまを百種類、大変細やかな筆致で描かれたものでございます。その後、今度は『うなゐの友』という、これはさきほどの大供会の同人でいらして、日本の人形玩具研究の先駆者でいらした清水晴風という方が6編までお描きになった画集でございまして、日本の人形玩具すべてというくらい載っているものでございます。晴風さんが亡くなられた後、笛畝さんがこれを受け継ぎまして、残りの4編を笛畝さんが仕上げられて、合計10編になって世に出られたわけでございます。これは笛畝さんの大変大きな業績だったと思っておりますが、なんとこの時まで弱冠28歳でいらっしゃいました。それを考えると、この方の才能というのは大したものだったなと、今拝見して思うわけでございます。

さきほど申しました「大供会」のことですが、明治42年に笛畝さんのご養父でいらした仙湖さん、『うなゐの友』を描かれた清水晴風さん、童話の巖谷小波さん、久留島武彦さん、古書の収集などで有名な林若樹さん、東大の当時の帝国大学の先生で考古学で有名な坪井正五郎さん、この方はご自分でおもちやも作ったりする大変楽しい方だったようですけれども、そういった方々をメンバーにして、当時の知識人たちが結成した一種の趣味の会で ございます。「大供」というのは、「子供」に対する対語でございまして、子供ではないけれども子供の心を持っているということで、多分「大供会」という名前を付けたのだと思います。会の趣旨といたしましては、人形玩具に対する知識の交換であったと記されておりますので、これが日本の人形玩具文化研究の出発点であったかなと思います。ひいては児童文化学研究の出発点になったのが、この大供会であったかと思われまして。この辺のことは、岩波書店から出ました『「敗者」の精神史』という本がございまして、もう亡くなられた文化人類学の山口昌男さんという方が書かれた名著に大変詳しく書いてあります。「敗者」というのは、「勝者」に対する「敗者」で、その

頃、明治政府というのは薩長政府ですが、そういう「勝ち組」の方々に対し、江戸の文化を研究しようという「負け組」の人たちが集まって、こういう会を作ったため、『「敗者」の精神史』という本が出ております。なお仙湖さんにつきましては、同じ山口さんの著書で『内田魯庵山脈』が出ており、その中に詳しく書かれております。

仙湖さんは明治の直前の元治元年、滋賀県大津の穀物問屋にお生まれになって、上京して実業界に身を投じられ、大変成功なされた。銀行家としても財を成された方ですけれども、明治41年以降はぷつぷつりと実業界から手を引かれて、趣味の世界に没頭される。そして特に大正2年に没するまでは、古いお雛様の収集に力を注がれまして、それが笛畝さんにそのまま引き継がれた仙湖さんのコレクションだったというわけです。なお「仙湖」というお名前は、お体が痩せていらしてお線香のように細いと、それで「仙湖」というお名前になったと伺ったことがございます。確かに私が子供の頃に覚えておりますのは、西澤夫人になられたかつこさんのことですが、ほっそりして鶴のように痩せた、非常に上品な方だったということをお子供心に覚えておりますので、多分、仙湖さんもお線香のように痩せているので、「仙湖」という号をつけられたのではないかと考えております。

昭和の戦前になりまして、人形芸術運動とのちに言われる運動が出てまいります。明治以来、帝展、帝国美術院展というのは、絵画と彫刻のみに限られておりまして、いわゆる美術工芸は全く入っていませんでした。昭和2年、第4部の美術工芸という部門が初めて設けられまして、そうしますと人形も美術工芸の1つであろうという事で、久保佐四郎という、仙湖さんが大変愛された人形師が、ただひとり出品しました。ところが見事に落選してしまい、久保佐四郎は大変憤りまして、われわれ人形師のものは工芸美術として外道視されるのかと憤慨しました。審査員側から見ますと、ただ一点では比較のしようがないので、入選しなかったと聞いております。まだまだ人形というものは芸術に程遠いということで、一般には考えられていたようでございます。人形はおもちゃの一部である、あるいは人形なんかは玩具であるという考えが世間一般の考えだったと思います。

玩具については、明治の中期くらいから、「教育玩具」という言葉がさかんに言われ始めました。おもちゃは教育に役立つものということで、教育玩具という言葉は一般化しましたが、これに対し、人形については、「美術人形」という言葉はよく使っておりましたが、実際には職人さんたちの中では、人形は美術であるという認識はまだまだ低かったようで、名前だけがひとり歩きしている感じがございました。

そんな中、久保佐四郎が帝展に応募したのは昭和2年ですが、この昭和2年に社会的に大きな出来事がございます。それは今でも話題にされています。アメリカから「青い目の人形」といわれている、要するに西洋の人形が1万数千体、日本にやってくるわけです。それを各幼稚園・小学校に文部省が配りましたが、それに対し、日本でも何かお礼をしなければならない



ということで、81センチという大型の市松人形を58体用意いたしまして、通称、お答えするお礼と書く「答礼人形」をアメリカに贈りました。全米各州、あるいは首都に贈ったわけですが、その人形が大変素晴らしかったのが、世間の人たちが日本人形はこんなに素晴らしいものなのだという認識を新たになさいました。そうしますと、心ある人形師たちは、自分たちの人形も芸術の仲間入りができるのではないかと考えまして、その人たちが集まって団体を作りました。それが「白沢会」です。白沢というのは、中国の架空の霊獣の名前です。何人かの作家たちが集まり、それを笛畝さんとうちの父が指導

しました。その中には、のちに人間国宝になられた平田郷陽さんもおられましたし、お写真では木彫りの池野哲仙、笛畝さん、木目込みの名人の名川春山、いわゆる江戸の精神をそのまま受け継いだような、非常に小味ないお人形を作る久保佐四郎、のちに人間国宝になる平田郷陽、御所人形を作っていた岡本玉水、のちに吉田永光という押し絵の名人も加わる、いわゆる職人集団でした。非常にいい技を持っている方々の集まりで、白沢会という名前を笛畝さんがお付けになったのだと思います。

のちに昭和9年、庚日会、昭和9年は庚犬の年ですので、庚日会という名前をつけ、これに鹿児島寿蔵、堀柳女、野口光彦たちが加わっております。これは白沢会の作品の図録でございます。何回も展覧会をしておりますが、『新日本人形集』という白沢会の図録でございます。そうこうしている間に、昭和5年からは、笛畝さんと私の父親がメンバーになり、「童宝美術院」という美術団体を作りまして、それには洋画家の石井 柏亭さん、美術史家の笹川臨風さん、当時美工、今の芸大の校長の和田英作さん、彫刻と絵画で有名だった山本鼎さんなどを同人にして、子供の宝を美術にしようということと思いますが、「童宝美術院」という組織を作りました。これは昭和5年から10回にわたって、公募から若い優秀な新人を育てようという狙いもあったということで、日本橋の三越で毎年公募展を行いました。これはその図録です。笛畝さんが全部表紙を描いていて、大変関わりが深かったようでございます。

昭和8年になりますと、私の父の山田が会長、笛畝さんは顧問になり、「日本人形研究会」という研究団体が作られました。これは日本で一番最初の人形の学校で、プロの方約100名、アマチュアで人形を作りたい人が約50名、計150名で組織された研究団体です。そこでは、今まで誰にも公開したことのないプロの技を公開いたしました。それから女性の団体を育てるということで、これは日本人形研究会の中の女性たち、プロの技を学んでいる「人形すがたの会」という会のひとつの情景でございます。それまでは、人形は買って来た材料で作るという、例えばフランス人形などがありましたが、本当に最初から、彫塑から人形を作るという技術、あるいは胡粉を塗るという技術は、ここで初めて一般に公開されたわけで、そういう意味で日本人形研究会はのちのちまで影響を及ぼした会でございます。のちに人間国宝になられた鹿児島寿蔵さん、堀柳女さんもこの研究会に属して勉強されました。

そんな風潮の中で起ったのが、「松田改組」です。当時、松田源治という文部大臣が沈滞ぎみだった帝展というものを少し奮い立たせようとし、帝展の組織を変える「帝展改組」が行われました。そのことをきっかけに、笛畝さんはその人脈をフルに活用されまして、美術界の有力者たちを説き伏せて、人形の帝展への進出の筋道をつけたわけでございます。なお、そこに至るまでの経緯につきましては、ごく最近、のちに人間国宝になる平田郷陽さんのお宅から、昭和10年に発行され、従来「幻」といわれていた「人形制作」という本が発見されまして、その中で笛畝さんが非常に興味深いことを書いておられます。

これは平田郷陽さんの写真ですが、この方は生き人形といって、生きたような、等身大の人形を作るおうちの出身でいらっしゃるようですので、生き人形を作っているらっしゃる大変珍しい写真です。生き人形というものは、のちにマネキン人形になったりするわけですが、生きたような人形を作るという、非常に技術の要る作品でございます。平田郷陽さんはこういう生き人形で修業したことを基礎に、のちの作品を展開されるわけでございます。

「人形制作」の中で、笛畝さんは人形芸術の思い出を書いていらっしゃるようですが、そこによりますと、笛畝さんの家にある晩、父の山田と久保佐四郎、野口光彦の3人が夜10時過ぎに訪ねてきて、ぜひ帝展に人形を出品するよという請願書を書いてくれと、書いてくれるまで帰らないと言ったそうです。笛畝さんはやむなく、その晩徹夜なさって、帝展に出す人形を「美術」として加えてくれという請願書を書かれました。そのことをその本の中に書いておられて、いきさつがわかったわけでございます。それまでは、研究者の書いたものを見ますと、この運動は作者側から出たのではなくて、笛畝と山田が独断で図ったものだろうと、そういうふうにかかれていたり、さらに極端なものになりますと、山田と西

澤の両名の利益のためにやったのではないか、というようなことも書かれていました。私はこれを大変心外に思っておりましたけれども、この笛畝さんの「人形制作」に書かれた文章を拝見しまして、やっと胸に落ちたというか、わかったわけでございます。またその請願書を徹夜で書かれたということは、笛畝さんのひとつのお人柄がわかるエピソードであると感じました。

そして昭和11年に人形が6者、6人の人形が入賞するわけでございます。これは今、近代美術館にあります、平田郷陽の一代の傑作と言われております「桜梅の少将」。生き人形の技術を現実に生かした名品と言われております。そしてこれは今、横浜人形の家にあります、やはり戦前の平田さんのお人形で、まだ生き人形の面影を残したのですが、大変よくできた「粧ひ」というお人形です。これは鹿児島寿蔵さん。この方は紙塑といって、和紙の粘土を基に人形を作られる方でございます。もともとは博多人形出身の方でございますけれども、大変勉強をなさしまして、こういう素晴らしい人形を作られる方で、歌人としても有名な方です。あと堀柳女さん。この方は日本人形研究会で勉強なさった方で、もともとは竹久夢二さんのお弟子さんだったのですが、そこから人形作りを始め、のちにこのような非常に芸術的な人形を完成されました。それから、さきほどの入選者6人の中にいらした野口光彦さん。この方もやはり職人さんで、頭師の出身ですが、のちに近代御所人形と言われるものを大成した、大変優れた、平田郷陽さんと並び称せられる名工です。ただ惜しいことに、この方は戦後に文部省のお役人、あるいは文化庁の方から、「お前を人間国宝にしてやるぞ」みたいな偉いことを言われたらしいのですが、江戸っ子なものですから怒ってしまって、「人間国宝なんか要らないよ」と断ってしまったという、大変もったいないエピソードをもっている方でございます。そのために生涯、無冠の帝王で過ごされましたが、平田郷陽と並び称される名工でございます。その中の近代御所人形の代表的な「鏡と子供」という作品です。

そんなことで6人が入選したわけですが、人形が社会的に「芸術」として認められた一番最初のことだったと思います。うちの父もこの時、大変喜んだようでございます。この6人に電報で俳句を送っておりまして、その中の「六歌仙」というのが選ばれるという。6人入選して、しかもひとりが堀柳女さんという紅一点でございましたので、その6人を「六歌仙」になぞらえた状態にしようかと。そういう俳句をみんなに祝電で打ったという記録が残っております。

こうした人形芸術運動の本当の原動力になったのは、ひとえに笛畝さんの存在であったと考えております。その人柄によるところも、きっと多かったものでございましょう。皆さんが笛畝さんに従ってこういう活動をされたわけですから、お人柄というものが偲ばれると思います。なお、今回展覧会の中で、私どもは大型の色紙を一枚出品いたしましたけれども、これは多分、昭和の初め、戦後が始まった頃、福岡で博多人形の展覧会に審査員が何かでみんな呼ばれたんだと思いますけれども、その時の寄せ書きでございまして、笛畝さんがさらさらと書いておられて、その脇にうちの父や人間国宝になられた方々が寄せ書きをしていらっしやいました。秋だったようですので、秋の筑紫地を伸びやかにこの方たちが歩いて行った風景が目に見えます。今考えますと、それらの方々はかつて人形芸術運動に携わったというか、共に戦った、かけがいのない同志であったわけですから。そう考えますと、色紙を見て、私は感慨ひとしおに思います。

笛畝さんは戦後、昭和29年、文部省の無形文化財保護委員会の審議員になられまして、昭和30年以降に制定されます重要無形文化財、いわゆる人間国宝の人選にも深く関わっていらっしやいます。昭和31年からは、今なお続いております日本伝統工芸展、それを主催する社団法人の日本工芸会の初代理事長にもなられまして、昭和40年に76歳で逝去されるまで、まさに公私ともに日本の人形界のために尽くされた人生でいらっしやいました。ご著作もたくさんございまして、本当にいいものをたくさんわれわれのために残していただいております。またそれはやはり、人情豊かな下町に育たれた、そしてお若いうちから非常にご苦労なさって、並々ならない勉強をなさった、そうした氏のお人柄によるところが多

かったのではないかと思います。さらに申しますならば、ここにはいわゆる通常の人形コレクターとは違った、一味もふた味も違う、優れた絵描きさん・画家の目というものが常に働いていたように思われます。ご著書の中の「人形は立体浮世絵である」という言葉を、名言として私は心に刻んでおります。確かに、浮世絵というのは平面ですけれども、人形は立体でいろいろなことを表しているものですので、「人形は立体浮世絵」という名言は、笛畝さんの画家としての目から生まれた言葉ではないかと思います。私どものように、ささやかながら人形玩具研究を志す後輩にとりましては、本当にその恩恵に対して、心から感謝を捧げたいところでございます。またその笛畝さんのコレクションを、願わくば一日も早く、さいたま市で公開・展示する場所ができますようにということをお祈りしております。以上、私事を交えまして、誠に拙い解説でしたけれども、笛畝さんのご経歴、業績などをお話しさせていただきました。ありがとうございました。

◇小林氏と大槻氏の対談

大槻：ありがとうございました。改めてお話を伺いたいと思います。さきほどお話を伺っていて、笛畝さんのお人柄とかを仙湖さんがまたいち早く見抜いていらしたということですが、出会いは24歳で？

小林：23か24歳でいらっしゃいますね。それを見抜かれた仙湖さんという方も本当にお偉いと思います。

大槻：そしてかつこさんの婿養子に、その翌年にはご逝去なされた。火曜サスペンスの題材にもなりそうですね。仙湖さんの中で余命を感じていらっしゃって、急いでいらっしゃるのでしょうか？

小林：それはわかりませんが、一日も早くお嬢様のお婿さんを見つけたかったのでしょうか。これはいい人が見つかったと、仙湖さんのお眼鏡にかなったのが笛畝さんだったと思います。

大槻：その後も、笛畝さんは遺志を受け継いで、人脈を使って、人形に関しての尽力をなさって、絵の方でも画家として日展に人形の絵を出さず？

小林：はい、人形の絵はたくさん描いていらっしゃいます。求められて描かれることもあったと思いますし、楽しみながら人形の絵をお描きになったことも随分おありだったと思いますし、笛畝さんという、人形の絵でむしろ知られているようですが。

大槻：花鳥の絵ではどういうご存在だったのでしょうか？

小林：花鳥画としても、やはり正統派でいらっしゃいます。荒木寛畝、荒木十畝さんの後を受け継いでいらっしゃるわけですから。

大槻：それで賞を取るという事も？

小林：おありでした。帝展にお出しになっているのは、人形の絵ではなくて花鳥画でございますから、その力量も大したものだったと私は思っております。

大槻：西澤家、仙湖さんの遺志を継ぎながら、荒木派のこともずっと守ろうとされていた？

小林：はい、一門を率いていらっしゃいましたので。

大槻：大変情深い方でいらっしゃったのですね。これは先生のご本にもございましたけれども、今3月ですので、お向かいのホテルでもお雛様が飾られておりましたが、お内裏様の立ち位置は？

小林：毎年これは話題になります。

大槻：問い合わせのお電話が一番多いとのことですが？

小林：新聞社とテレビ局が一番多くて、クイズに出しますとおっしゃる事が多いのですが、これはクイズにはなりません。現代式と古式と両方あるわけで、どちらをお使いになってもいいのですよ、というのが答えです。昭和3年に昭和天皇がご即位になりましたが、お写真が新聞などで報道さ



れ、よく田舎のお家で天皇皇后のお写真が飾ってありますが、あれが今の現代式のお並びです。今は、結婚式も現代式のお並びです。それに時代が時代でしたから、お雛様も合わせようということになりました。多分笛畝が指導なさったと思いますが、公共の業界がそれに従ったわけです。そして現代式の並びのおひなさまが、昭和以降に生まれました。それまではどちらかというと、日本の考え方として左は上位ということで、おひなさまの左にお内裏様。ですから、京都など古い土地に行きますと、今でも古式の飾り方をしているらしいです。古式と現代式両方ありますよと、どちらをお選びになるかはその方の自由ですよと、クイズにはならないというのが答えです。

大槻：今回、西澤笛畝といろいろ歴史を紐解いていただきましたけれども、もし笛畝さんが今もご存命だとしたら、人形業界というのはまた違いますか？

小林：そうですね。業界をずっとご指導なさっていらっしやったでしょう。

大槻：生きていたならと思われることはございますか？

小林：古いことをきちんと踏まえていらっしやる方が、今はいらっしやらなくなりました。人形が時代とともにどんどん変わっていくのは仕方がないのですけれども、やはりひとつ、一筋、日本の人形の良さというものをこうやって伝えてほしいということをお助言なさる方がいらっしやらなくなったのは、大変残念なことだと思います。

大槻：今、無形文化財が有形になるようなことというのは？

小林：人形は、国宝も重要文化財、あるいは重要美術品にひとつもございませんので、笛畝さんがもし生きていらしたならば、この人形は重要美術品になってもいいのではないかというご助言を文化庁あたりに進言なさったと思うのですが、いまだに人形の本当の意味での国家が認めた文化財というものがありません。ちょっと残念です。それも、人形というのがあまりに人々の暮らしに近かったからで、芸術である前に、親しまれ過ぎていたということもあるかと思えます。

大槻：それはおひなさまのように？

小林：おひなさまですね。「おひなさま」とか「お人形さん」と申しますように、どうしても日本人というのは人形の中に「人間」を見てしまうというか、擬人化してしまうことが多いです。それだけ、人々に親しいものである。またその発祥は「ひとがた」という、人間の形をしたものに自分の災いを映して海や川に流すという、そうした古代的な信仰の面もありますので、その辺が人形が純粋な美術になりきれなかったところかなと思います。この時代になりますと、古い人形は本当に美術品としても素晴らしいものが多いので、ぜひ人形の重要文化財あるいは重要美術品が生まれることを望んでおります。その辺は、お役所の考え方もございますので、なかなか私どもの考えは通りません。

大槻：さきほどらわ美術館で見せていただいたんですけども、小林先生が「可愛いわ」「これは素晴らしいわ」とおっしゃる人形がたくさんありました。まだご覧になっていない方はぜひ美術館の方に足をお運びください。

◇質疑応答

大槻：ではここで、質疑応答の時間を取らせて頂きたいと思えます。人形にまつわることで、小林先生にこの際だから聞いておきたいということなどございましたら、挙手をお願い申し上げます。

質問者1：作品の補修、保持に大変な予算措置が要すると思うのですが、そのことについてちょっとお教えいただきたいと思えます。私は入間市の日本画家でございます。

人形が老化していくというか、特に江戸時代のものなど、それを補修する、直して美しく保つというのは、大変な費用がかかるだろうと思うので、そのことについて、入間にも美術館がございますので、そんなお話をお伝えしたいと思えます。

小林：費用の点より、直す技術というのが大変難しいところがございます、特に胡粉塗りの人形が割れますと、それを上から塗ってしまえば簡単なんです、そうしますと文化財的価値が全く消えてしまいます。その辺は、今日、笛畝さんの人形の修理をされている新井はるなさんがいらして

いますので、新井さんからお聞きになってくださいませ。修理の難しい点、それからどういう修理を目標になさっているか。

新井：現状維持というのが一番大切なことだと思います。ですから、汚れているからといって、全部取って白く塗り替えたり、衣装を替えたり、髪が劣化して坊主になったら新しく植えてしまうとか、今まではそういう修理が多かったですが、そうではなく、今よりも悪くならないよう現状維持とか、劣化を防止・阻止する、そういう修理が望まれていると思います。ですから、ちっとも直っていないみたいじゃないかと思われることもあるかと思いますが。接着剤に関しても、今できる技術よりも、後世、もっといい技法ができたときにはそれに移せるように、接着剤を使う時には可逆性のあるもの、直しが利くもの、そういうものを使って修理していく事が必要かと思います。お金については、さいたま市の方が予算を組んでくださって支払ってくださるというので、予算についてはそちらに伺ってください。入間といえば、去年入間の歴史博物館、あそこのものを直させて頂きました。

大槻：実際、絵を修正するよりも、人形の修正の方がはるかに難しいですか？

小林：そうですね、もちろん絵でも国宝級のを直すのは大変な努力がお要りようかと思いますがけれども、人形の場合、立体でございますのと、胡粉というものの扱いが大変難しいので、割れたりしますと大変修理に苦労するところだと思います。先ほどの新井さんが笛畝さんの人形の傷んでいるものをご苦労して修理されている最中でございます。

大槻：立体の浮世絵ですものね。浮世絵でしたらレプリカが。

小林：そうなんです。人形の場合は、レプリカはできませんので。

大槻：吉徳さんにもそういう蔵が？

小林：私どものコレクション、吉徳コレクションという、父が集めたものがあり、会社に資料室を設けまして、人形だけでなく人形関係の文献、浮世絵、たくさんありますので、よく展示をしたり、お貸出ししたりということがございます。今回の展覧会にも数点、私どもから出品させて頂いております。



大槻：やはり保存状態というのでワインセラーじゃないですけど、湿度や温度をずっと一定にされていたりですか？

小林：そうですね。温湿度というのはなかなか難しく、それを一定に保つことが人形にとっては一番宜しいのですが、展示のために外に出したりすると、それが崩れます。そういうこともありまして、なかなか展示という事も、人形にとっては果たしていいことなのかなと思います。そうかと言って、しまえばなしというのも人形が可哀想でございますので、やはりいいお人形はみなさんにお見せしたいと思います。私どもは今度会社を建て直し、小さな展示室を設けまして、人形の展示を季節に従ってやっておりますが、なかなか保存については苦労するところでございます。

大槻：こちらの意に反した展示のされ方だったり、場所だったりというのもおありですか？

小林：そうですね。例えば百貨店などで展示したいと言われますと、夏は冷房が入りますし、冬は暖房が入ります。温湿度の管理など全くできなくなってしまいますので、お断りするのにも苦労します。

大槻：人形の状態が悪くなるからと？

小林：収蔵庫から出して、美術館博物館に出す間でも、温湿度が変わってしまうわけですから、なかなか古い人形で傷みがきているものをお貸しすることは難しくなっています。

大槻：吉徳さんの展示場というのは？

小林：本社の4階に新しく設けまして、無料でいつでもご覧いただけますので、近くにおいでの方はぜひお立ち寄りください。

質問者2：胡粉の練り等が難しいとおっしゃっていましたが、胡粉を少量で練るとするのは難しいと思うんですね。修復というのは部分だけになるので、今、市販で練った状態の胡粉も置いてありますが、修復した時、部分を直す時は、全体とは違う胡粉を入れていくことになると思うので、胡粉を少量で使う事は、またのちの全体の劣化につながることはないのかと思います。胡粉を塗った作品を作ることがあるんですが、今後の修復のためにちょっとお聞きしたいと思います。

小林：それも専門家に答えていただきます。

林：吉徳資料室の学芸員の林が、お答えさせていただきます。文化財という見地に立っての人形の修理の場合には、必ずしもそもそも胡粉を同じように使うということに限らないわけです。同じ素材を使って直すのではなく、ここを直しましたということがわかるように、あえて違う素材で、そのところを仮に押さえておくということも行いますし、またおっしゃるとおり、当初使われていたものと同質、同程度の素材または技術を使って直すというものもあります。それはそれぞれの、個別の事例ということになっていくと思います。今の段階では、何が一番適しているのかという事をすべてに同一に見解を出すというのは難しいと思います。そういう点で、先ほどの新井さんのような、あくまでも文化財としての現状維持という立場で修理に立たれているというのが、今後の人形修理の確立という点でも非常に有効なことだと思っております。そういうことにさいたま市が理解を示して、笛敷さんの人形の修理をされているというのは非常に素晴らしいことだと思っております。

質問者3：普通に人形ケースの中に、いろいろな木の材料とか陶器の材料とか、お土産の人形を飾っているのですが、地震が起きた時に壊れてしまうのではないかと心配があります。それが震度5くらいの地震で、人形ケースが落ちてしまえばもうおしまいですが、落ちないで、中でガチャガチャとならないようにする方法は、何かアドバイスをしていただけると嬉しいのですが。

小林：私共の展示室は小さいですし、地震で落ちるような展示にはなっておりませんが、商品の場合はどうしても落ちたりしますので、3.11のときはかなり落ちました。おうちでお飾りになっている人形ということでしたら、うちの林がお答えいたします。

林：ホームセンターなどで、小物を仮止めするものが、今は色々売っています。東日本大震災などもありまして、おうちの中でいろいろなものが落ちたりすることを皆さん気を付けられるようになっているので、小さい両面テープの弱いようなもので、ものを固定するものとか、ひつつき虫といって、ゴムの柔らかいもので仮止めできるようなものとか、そういうものでちょっと工夫するだけでも大分違います。大概の場合、置いてあるものだと前にバタンと倒れる、棚から落ちるといったようなことになりますので、前の方にちょっとものを噛ませて、前の方に倒れないようにするだけでも、大分落ちる率は違います。

質問者4：今お話のような高尚な人形ではなくて、郷土玩具のような人形のことでお聞きしたいのですが、郷土玩具にカビが生えてくるケースが結構あります。顔が黒ずんでしまって、あばたになるケースがかなりあるようで、日頃個人でできるような修理や保存方法がもしありましたら、そうなった時にはどうしたら元通りになるか、その辺のところをアドバイスいただきたいと思います。

小林：カビの問題は本当に難しいところございまして、林がお答えいたします。

林：やはり一番は置かれている環境です。私自身、もともと郷土玩具のコレクターですので、うちに何千点と收藏しておりますけれど、風通しが悪くなれば、カビは生えやすくなります。特に郷土玩具とか、日本の伝統的な人形玩具の場合、胡粉を、膠を接着剤として塗料として塗っているものがほとんどなので、その膠の成分でカビが生えるんです。それが、湿度が高い、ジメジメしたようなところだと、カビが生えやすくなりますから、まず通気性のいいところ。ずっとしまったきりにしておくと、カビが生えますので、時々虫干しのようなことをして頂くとか、まず置く場所をどうにかしていただく。出てしまった場合には、カビの場合は菌ですから、それを殺さなければならぬ。アルコール的なもので除去したりとか、表面をごくわずかにヤスリで落とす。軽

く表面のところだけを取るという処置ですけれども、そういう対策をしていただくということが、個人でもできる事かなと思います。

質問者5：今日は「笛畝とその周辺の人々」ということで、親子関係も含めて幅広い人間像を小林先生から伺って、改めて笛畝の魅力を私なりに評価させていただきました。私は人形っていったい何だろうという事をお聞きしたい。小林先生はご幼少の頃から人形との接点が多く、人形に対する思いが交錯していると思うのですが。今日、うらわ美術館で展示を見て、海の向こうの人形玩具の中で、イタリアの木彫り人形の赤ちゃん2体、ミクロネシアのロクベエ人形、玩具の中で一括展示されていた小箱に入っている立ち雛、この3点に私は惹かれました。信仰的な意味、行事との関係、いろいろな点が入形にはありますが、私の場合は、今日の場合は3点、非常にインパクトのあるものでした。小林先生にとって人形は何なのでしょう？

小林：人形って何だろうというのは、私たち日本人形玩具学会の永遠のテーマと言われるかと思います。私にとっての人形は、ひとことでは申せませんが、日本の人形に限って言えば、日本の民族・風俗などがすべて込められている、研究対象としてはそういう見方しております。私自身はコレクションもしていませんし、うちの父もそうでしたけれども、人形にあまりのめり込んでしまうと、ものが見えなくなる。そういうことをよく言っております、ある程度離れてものを見る、そうしないと、客観的にもものが見られない、私もあまりのめり込まないで、人形を見ております。そこにある日本の伝統的な、先祖代々続いている民族・風俗というものを古い人形からは感じ取ることが多くて、人形というものは何だろうと考えながらも、これは本当に素晴らしいものではないだろうかと思っているわけでございます。人形というのは何かという答えは、まだ私の中では出ておりません。



質問者6：今のお話の中で、イタリアの木こりのピケチオといった玩具があり、あれはまさに日本のこけしと全くそっくりなのですが、ああいうものの起源といいますが、いつ頃で同じような起源をもつのでしょうか。もしご存知でしたら。

小林：人形の起源というのは、古代の素朴な信仰から出ているものだと思いますが、それが日本の場合は脈々とひなまつりというような習慣の中で、日本人の民俗として伝わっております。あちらでは信仰的なものから発しても、どこかでそれが近代文明に毒されたと申しますか、切れてしまって、人形はオモチャであるという考えが広まってしまったのではないかと思うんですね。日本とはちょっとその辺が違うかなという気がいたします。むしろ古いインドネシアの人形ですとか、そうしたもののの中に、昔からの信仰が生きている。ヨーロッパの人形はそれがむしろ途切れてしまったような感じを受けております。ですから東南アジアの人形なんかは非常に教えられるところが多いと思います。

質問者7：西澤笛畝と今回の岩槻人形会館のプレ事業ということですが、西澤笛畝とさいたま市とのつながりについて、先生の方でおわかりになることはございますか？

小林：笛畝さんの人形自体は、戦前戦後を通じまして、常盤台という東京のお宅にあったんですが、それが昭和50年代に埼玉県に移りまして、そこに笛畝人形美術館というのができました。ご遺族の方がとても持ちきれないという事で、二転三転いたしまして、さいたま市に寄贈になったわけでございます。本来は笛畝さん自身とさいたま市の関連というものはなかったんですが、笛畝人形美術館ができたことによって、埼玉県との関連ができて、そしてさいたま市が岩槻を含む人形のまちでもございますので、これをお引き受けになるということになったのだと理解しております。

大槻：今回の展示会は非常に期間が短いとのことですが。

小林：そうですね。会場の都合で、本当だったら3週間くらいはしていただきたい展示なんですけれども、まもなく終わってしまうという事で、3月8日までです。大変惜しい展示会でございます、そういう意味でも、笛畝さんのお人形の会館がちゃんとできまして、いつでも皆さんが楽しんでご覧になれる施設が一日も早くできる事を私は希望しておりますが、なかなか難しい所でございます。

大槻：それではそろそろお時間でございます。これにて本日の公演を終了させていただきます。